

「……」

「いい加減決めたらどう？」

「うるさいな、今この瞬間こそが戦況の分かれ目なんだよ。急いで事は仕損じろ。ただ前に突き進むだけではいけない事を、私は学んだわ」

「それはまた、殊勝なことだ」

「ええそう、そうよ。あいつに——靈夢に勝つためならば、私は己の矜持を捨てることも厭わない。それくらい覚悟で挑まなければ、あいつには勝つこたないからね」

「そうなのよ、ともう一度自分を納得させるように呟いたレミリアが、腕を組んだ姿勢のまま押し黙る。盤台の前に、敷いた座布団の上に胡座を組み、開いていた扇子をはちんと閉じる姿は、行儀こそ悪いものの、正しく棋士のそれ。しかし、如何せん身に纏うロリータファッションが全てをぶち壊していた。

——はてさて。

盤台の横に並べられた、ままごとにも使うような小さなテーブル。その上に置いていたティーカップを手にとって、ほうと一息。

一分の隙もない完全な洋室で、豪華なベッドや、そ

れだけでもアンティークとして価値がありそうな額縁に入れられた絵画を横目に、真つ赤な絨毯の上に若草色の座布団を敷いて、紅茶を啜りながら盤台を挟んで相対する。

片や全身が埋もれそうなほどのフリルがあしらわれたロリータ服に、見事な筆文字で『麗美理亜』と書かれた扇子。

片や流水を模した蒼の着物に、真つ赤な紅茶の入ったティーカップ。

この節操のない和洋折衷。最初こそ随分とチグハグなものだと思っていたが、レミリアの突き抜け過ぎたあれこれのセンスも含めて、最近ではすっかりと慣れてしまった。

『麗しく美しく、理知的でなおかつ理性的、そしてロシアだとかアジアだとか、とりあえずでつかいものに使われている「亜」は私の雄大さを表しているのよ』初めて聞いた時は、それはひよつとしてギャグのもりなのかと思っただけ、残念な事にこの幼女はどこまでも本気だった。そしてその後ろでは、彼女の一番の従者が涙を流して感激していた。

ほんと、どこまでも突き抜けてる連中だわ。

『軍人将棋は知っているか?』

珍しい生き物が冥界に来たと思つたら、突然そんな事を言われたのが一月余り前の事。

聞き馴れない言葉にはたと首を傾げていると、傍らに控えていた妖夢が勢いよく身を乗り出して、

『軍人将棋だつて!?』

『知っているのか妖夢!』

『軍人将棋……その源流は中国宋代、時の武將達が戦場にて自軍と敵軍の位置關係を示すのにチャトランガの駒を用いた事に発する。訓練された軍隊は指し示された盤上の駒の如き進軍で敵陣を潜りぬけ、必ず自軍を勝利に導いたという……。戦乱の世が鳴りを潜めた後も、シャンチーの駒の裏面を使い、かつての功績を振り返る者は少なくなかつた。しかしそこの記憶の食い違い、誇張などから反発する者が現れるのも必須ならばと駒に用いたシャンチーに倣い、盤上にて決着をつけようとしたのが軍人将棋の始まりなのである。

一説では度重なる戦を取めるために、戦いを模した遊戯を高僧が作つて時の権力者に献上したのが始まりとも言われるが、定かではない——と、民明書房刊「盤上遊戯」からですが

『長つたらしい説明台詞をありがとう。でもこれつて、字面でやると今一つ迫力が無いのが、なんとも残念な

ところよねえ』

『ですわね』

『……楽しそうだな、お前達』

『で、その将棋もどきがどうしたの?』

『……………』

『お嬢様、私が話しましょうか?』

『いやいい、自分で言う』

これまた珍しく神妙な顔付きで語り出した彼女曰く、三年ほど前に香霖堂で軍人将棋の一式を見つけ、珍しいという理由だけで買ってみたのはいいものの、勝負を挑んだ靈夢に完膚無きまでに叩きのめされたらしい。『当時その所為で不貞寝をしていたら、妹が暴れたり小悪魔が下らない事をしてかしたり、おかげで咲夜がポロポロになつたりと大変だつたわ』
ねえ、とレミリアが後ろに視線を投げると、控えていた咲夜も『酷い目に遭いましたわ』とでも言うように肩を竦めてみせた。

そんな無駄話を交えつつ彼女が語つた内容を纏める、なんてことはない、単純なことだつた。

——三年間で靈夢に九九九連敗している。

——もうこれ以上負けられない。

——誠に遺憾ではあるが、特訓の相手をしろ。そういう事だ。